



■今月の表紙

南極に春の訪れを告げるオーロラ
撮影/西山尚典 (国立極地研究所)
EF16-35mm f/4L IS USM (16mm F4.0)
キャノン EOS 6D Mark II
2018年9月15日00時58分59秒
南極 昭和基地にて
南極の長い夜も終わりに近づく9月のオーロラです。昭和基地にあるオーロラ観測用の建物の前で撮影しました。下端のピンクと上部の緑のコントラストが気に入っています。9月は春の始まりなので、ちょうど桃の節句の菱餅のようにも見えます。通常の菱餅と色の順が逆なのは南半球だからということにしています。

■広告さくいん

コニカミノルタプラネタリウム/表2
セレストロン/4
スワロフスキー・オプティック
(ハクバ写真産業)/8
ケンコー・トキナー/10
ケンコー・トキナー サービスショップ/64
TOMITA/66
アイベル/70
シュミット/72
笠井トレーディング/82~87
ウィリアム・オプティクス/102
ピクセン/114~表3
五藤光学研究所/表4
AstroArts/12、22、74、76~77、80
AstroArtsオンラインショップ/88~91

星ナビ2026年10月号
2026年9月4日発行・発売

14



いつでもどこでも

ステラナビゲータ・モバイル

上山治貴・角田光二

32

極限環境で見る究極

宇宙×南極

本多俊介



南極点アイス・キューブ観測所とオーロラ (撮影/John Hardin)

Deepな天文機材 Hα太陽望遠鏡フェニックス1

40

安心・安定の太陽観測

Sam

46

五藤光学研究所
100年の歩み

星を追いかけて1世紀

中野太郎

54

神話から天文学へ アテナイの学堂

第5回 この宇宙は何でできている? 自然哲学者たちの抗戦 早水 勉

News Watch

5 人気TVアニメが劇場へ 映画「宇宙なんちゃらこてつくん」 宇津巻竜也

6 リアル脱出ゲーム「真夜中の宇宙博物館からの脱出」 三浦飛未来



宇宙小物で脱出 (p.6)



太陽望遠鏡フェニックス (p.40)



五藤光学創業100年 (p.46)



明石でツァイスI型2号機 (p.68)

NEWS CLIP 石川勝也

由女のゆるゆる星空レポ 星の召すまま 13
最新宇宙像 沼澤茂美&脇屋奈々代 20
10月の星空 篠本新吾 23
10月の月と惑星の動き 26
10月の天文現象カレンダー 28
10月の注目 あさだ考房 29
新着情報 62
月刊ほんナビ 原 智子 65
アクアマリンの誌上演奏会 ミマス 67
ブラック星博士のB級天文学研究室 拡大版 68
天文台マダムがゆく 梅本真由美 71
天文学とプラネタリウム 高梨直統&平松正顕 73
天文・宇宙イベント情報 パオナビ 75

9、11

Observer's NAVI

●変光星 高橋進 78
●新天体・太陽系小天体 吉本勝己 81
星ナビひろば 92
●ネットよ今夜もありがとう 93
●会誌・会報紹介 94
●やみくも天文同好会 藤井龍二 96
●飲み星食い月す 96
ギャラリー応募用紙/投稿案内 97
バックナンバー・定期購読のご案内/編集後記 98
オンラインショップ運動 買う買う大作戦 99
KAGAYA通信 100
星ナビギャラリー 103
銀ノ星 四光子の記憶 飯島 裕 112

スマートフォンとタブレットに対応した天文シミュレーションアプリ「ステラナビゲータ・モバイル（以下、SN モバイル）」が8月4日新発売。

PC 版ステラナビゲータは天文シミュレーション、電子星図、望遠鏡制御、プラネタリウム番組や天体事典などのコンテンツといった様々な側面を持つ天文ファンのための総合ソフトです。

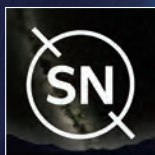
今回発売された SN モバイルは、実際の星空の下で必要になる星図機能や天体情報などを網羅したアプリで、iOS・Android に対応し、1 つのサブスク契約で複数の端末上で使用できます。

星空観望や撮影・観測に必要な機能をまとめた
SN モバイルを紹介します。

紹介◎ 上山治貴・角田光二（アストローツ）

スマホ・タブレットに対応
いつでもどこでも
ステラナビゲータ

StellaNavigator
ステラナビゲータ・モバイル Mobile®



極限環境で見る究極

宇宙 × 南極

現在、南極大陸には天文分野から熱い視線が注がれ、さまざまなプロジェクトが進められている。
なぜ天文学者たちは南極へ向かうのか。
日本が南極観測を始めて70周年を迎える今、
極限の環境でしか得られない
“究極の宇宙”を求めて旅に出よう。

解説 本多俊介

(筑波大学数理物質系、第66次南極地域観測隊)



1. 究極の空をもとめて南極へ



昭和基地では長期にわたってさまざまな機器でオーロラの観測を続けている。写真は2018年時の光学観測用のカメラ。(撮影/西山尚典(国立極地研究所))

日本から遠く離れた南極。日本の南極メイン観測拠点「昭和基地」からさらに約1000km離れた南極内陸部の「ドームふじ」に向かう。20人ほどのメンバーで雪上車に乗り込み3週間。燃料、食料、生活物資、研究機材を積んだソリを引きながら、数kmごとに立てられたフラッグとGPSを頼りに進んでいく。

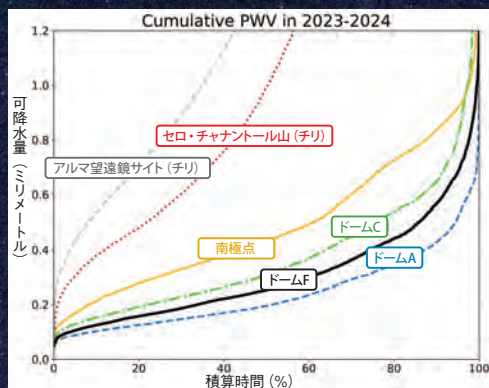
僕は「宇宙のはじまりとは何か」「宇宙の歴史の中で、星や銀河がどのように誕生してきたのか」を解明する研究をしている。この研究を飛躍させるには、地球上で最も

きれいに宇宙を見られる南極内陸部での天文観測がうってつけである。ここでは、僕が実際に訪れたドームふじへの旅と南極で進められている天文学プロジェクトを紹介したい。

なぜ南極の空はきれいなのか

最近の市販の天体望遠鏡は非常に性能が高く、都市圏でも星を観測できる(これは本当にすごい!)。しかし、星の姿をより細かく捉え、宇宙から届く微弱な光を測ろうとすれば、街明かりが少なく、空気の

昭和基地の管理棟とオーロラ。観測船「宗谷」で南極へ向かった第1次南極地域観測隊が1957年1月29日東オングル島に初上陸し「昭和基地」と命名した。地上気象や高層気象、オゾン層やエアロゾルの観測を行う設備がある。2018年3月。
(撮影/西山尚典(国立極地研究所))



NASA/GMAOのMERRA-2再解析データをもとに作成

世界の天文サイトの可降水量 (PWV) の比較。PWVが小さいほど水蒸気量は少ない。南極は一年を通じて安定的にPWVが低い。

昭和基地では宇宙天気・宇宙気候現象のモニタリングも行っている。写真左は地磁気を観測する短波(HF)レーダーのアンテナ保守作業。右は上空の気象データを得るために、観測機器「ラジオゾンデ」をゴム気球に吊り下げて飛ばそうとしているところ。(撮影／西山尚典(国立極地研究所))



薄い高地へ行く必要があるだろう(くれぐれもご安全に!)

さらに、銀河や星々の活動を詳細に明らかにするには、人間の目に見える可視光だけではなく、さまざまな波長での観測が必要となる。しかし、大気中の水蒸気は宇宙の光を吸収してしまうため、特に赤外線、サブミリ・テラヘルツ波の星の光は通常の地上には届かない。こういったことから大規模な天文台は乾燥していて大気の影響を受けにくい高地に作られる。

南極内陸部は標高3000~4000m(気圧は600~700hPa程度しかない)であり、気温は夏でも-30℃ほどで冬には-70℃を下回る極限環境だ。当然街明かりなど存在しない。これほど気温が低いと、大気中に含まれる水蒸気は極端に少なくなる。南極内陸部では水蒸気による障壁が非常に少なくなり、通常の地上には届かない

宇宙の光まで観測できる(夏のドームふじで可降水量はたった0.2mm)。

また、南極は太陽の出没がない白夜や極夜が長く続き、気温が安定することにも利点がある。地面と上空の温度差で空気が激しく混ざると、星像は揺らいでしまう。南極内陸部では、この乱れた空気層は地表付近に薄く存在するのみである。特に、ドームふじではその厚さが約11mと測定され、その上空では約0.2秒角という極めて良好なシーイングが得られることが示された(編集部注:日本での数値は1~2秒角)。人間には厳しい寒さと低酸素環境が、望遠鏡にとっては世界最高の観測条件を作り出している。

現在の南極ではさまざまな星の観測のほか、ビッグバンの残光の超高精度測定による観測的宇宙論やごく稀にしか反応しないニュートリノを対象とした高エネルギー物理学などの南極でしか実現しない宇宙観測研究も盛んに行われている。「宇宙望遠鏡を打ち上げればよいのでは?」と思うかもしれない。もちろん、大気に邪魔されない宇宙望遠鏡には絶対的な強みがある。X線のように大気をほとんど通過できない光は、宇宙から観測するしかない。一方、宇宙望遠鏡には、打ち上げられる大きさ、電力、重量に厳しい制限がある。現在最大の宇宙望遠鏡 JWSTでも主鏡の口径は6.5mである。地上なら10mを超える望遠鏡を建設でき、観測装置を最新型へ随時アップグレードすることもできる。南極内陸部は、大気の影響が極限に小さく、大型望遠鏡を建設できる優位性もかねそ

なえる。



安心・安定の太陽観測

今回から3回に分けて、ACUTER OPTICSのH α 太陽望遠鏡「フェニックス」を取り上げ、基本的な性能評価、撮影方法、そして少し発展的な応用について紹介していきたいと思います。第1回となる今回は、まず眼視での見え方を確認したうえで、分光器を使ってエタロンの性能を実際に測定してみます。

解説◎ Sam



ACUTER OPTICS H α 太陽望遠鏡 フェニックス

税込 154,000円 (望遠鏡ショップシュミット価格)

フェニックスで太陽観測をするとき、お勧めの架台がSky-Watcherの「ソーラークエストマウント」。GPSとソーラーセンサーを備え、アライメントすることなく自動で太陽を導入、追尾することができる。
税込 61,600円 (望遠鏡ショップシュミット価格)

太陽も星も見えるフェニックス

H α 太陽望遠鏡「フェニックス」の特徴は、昼間に使う太陽専用望遠鏡としてだけでなく、先端のエタロンユニットと接眼側のH α 用ブロッキングフィルターを含んだソーラーダイアゴナル部を、付属の一般的な天頂プリズムに取り替えることで、口径80mm、焦点距離400mmのアクロマート屈折鏡筒として夜間の天体観望にも使えることです(図1)。

H α 観測時のフェニックスは、口径40mm、焦点距離400mm、F10の太陽望遠鏡です。入門用のH α 太陽望遠鏡としては比較的手の届きやすい価格帯で、執筆時点の実売価格は15万円台です。公称の半値幅は0.6Å以下となっています。実際の見え味は価格から想像する以上のもので、一世代前の普及型H α 望遠鏡から明確な進歩を感じます。

これまで複数台のフェニックスを見る機会がありましたが、いずれも性能は安定していました。以前のH α 太陽望遠鏡では、個体によっては視野の一部だけコントラストが高く、場所によってH α 中心波長から外れて見える、いわゆる「スイートスポット」が気になっていました。フェニックスではそのような面内のばらつきがほとんど見られず、太陽全面にわたって均一に見える個体が多いという印象です。もちろん個体差が完全にはないとは言えませんが、私が見た範囲では再現性はかなり良好で、周りの方の話を聞いている限り、どの製品も一定レベルの安定した性能が出ているようです。

ただし、この2 in 1構造には安全上の注意が必要です。エタロンやブロッキングフィルターを外した通常鏡筒の状態では、絶対



図1 太陽も星も見えるフェニックス

太陽モード(上)と通常モード(下)。太陽モードでは先端にエタロンが取り付けられ、接眼部に特殊なソーラーダイアゴナル部を取り付けて使う。通常モードではエタロンを取り外し、接眼部を付属の一般的な天頂プリズムに換えて、さらにレッドドット式ファインダーを取り付ける。現在発売中のフェニックスのソーラーファインダーは、太陽をのぞく必要がないオープン形式のソーラーガイド(右)を装備している。



に太陽へ向けてはいけません。太陽を見る前には、前面の太陽観測用ユニットと接眼側のソーラーダイアゴナルが正しく装着されていることを必ず確認してください。特に子どもを含む複数人で観察する場合は、管理できる大人が機材の状態を確認し、通常鏡筒のまま太陽に向けられることがないように十分な注意が必要です。

H α 太陽望遠鏡のしくみ

フェニックスでは対物側に配するエタロンによってH α 線付近のごく狭い波長だけを選択します。ただし、ファブリー・ペロー型エタロンは図2のグラフの青線に示すように、H α だけを1本通す単純なフィルターではなく、原理的に一定の波長間隔

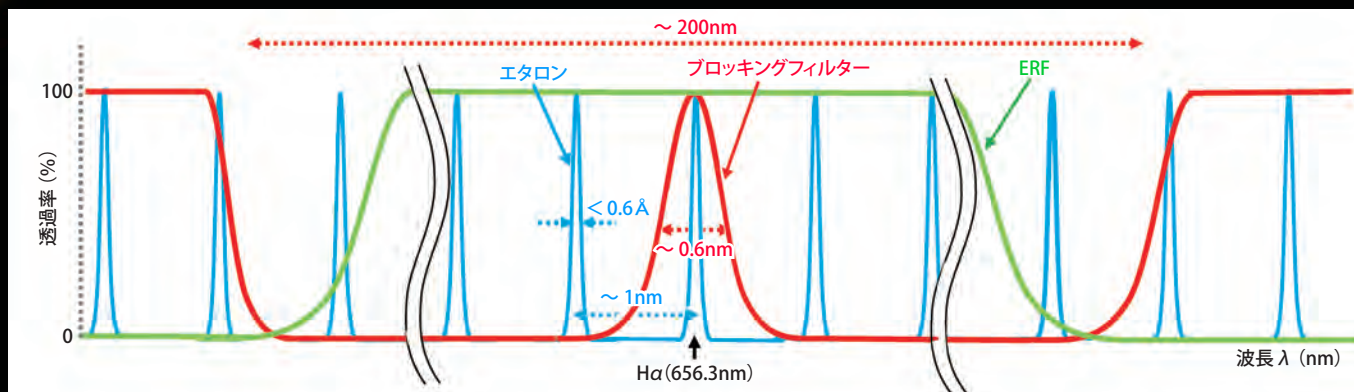


図2 太陽望遠鏡の波長透過特性 櫛形の透過特性を持つエタロン(青線)のH α 線付近のみを透過するように、ブロッキングフィルター(赤線)が周りの透過波長をブロックし、さらに広い範囲でERF(緑線)がブロックする。

五藤光学研究所 100年の歩み

星を追いかけて1世紀

天文ファンにおなじみの光学機器メーカー、
株式会社五藤光学研究所が今年9月に創業100周年を迎える。
子供の頃に初めて訪れたプラネタリウム、あるいは理科の授業や
星空観望会で覗いた天体望遠鏡など、宇宙の魅力に目覚めたきっかけに
「GOTO」の製品があった、という方も多いのではないだろうか。
そんな五藤光学研究所の100年を天文界の歴史とともに振り返ろう。

取材・文◎中野太郎(しぶんぎ社)

取材写真◎星ナビ編集部

取材協力・資料提供◎株式会社五藤光学研究所

荒井由実 作詞作曲の「中央フリーウェイ」という曲の冒頭で歌われていることで有名な、中央自動車道とJR南武線の立体交差が東京都府中市にある。ここから多摩川に向かって南に5分ほど歩くと、サントリーのビール工場の隣に府中市場（大東京綜合卸売市場）があり、さらにその南隣に八角形の建物が付随する会社が現れる。ここが株式会社五藤光学研究所（以下、五藤光学）だ。

星ナビ読者の皆さんの多くは、さまざまなメーカーの望遠鏡や双眼鏡をお持ちだろう。それらの光学機器メーカーの中でも、日本で初めて一般ユーザー向けの天文光学機器を専業で製造・販売したのが五藤光学である。

きっかけはハレー彗星

100年前の1926年（大正15年）に同社を創業した五藤齊三氏（ごとうせいぞう、1891～1982年）は、アイデアと商才、行動力を備えた人物だった。高知県出身で、旧土佐藩の士族の家系だったが幼少期は貧しかった。13歳で高等小学校を卒業した齊三氏は土佐農工銀行の給仕として働きながら、副業で養鶏や文房具店を始め、20代で製紙会社や無尽会社（現在の第二地方銀行）、鋳業会社などを渡り歩き、次々に起業や新規事業の立ち上げに携わった。

そんな齊三氏が天文に触れたきっかけは19歳のとき。土佐農工銀行時代の

1. 1インチ望遠鏡から始まった草創期

1910年（明治33年）に地球に接近したハレー彗星だった。夕方ふと、便所の窓から外を見ると、東の空一面にハレー彗星の長い尾が横たわる姿が見えて大変驚き、これを機に天文書を読みふけるようになったという。

1921年、齊三氏は日本光学（現（株）ニコン）に入社して庶務課に配属となり、事務方でありながら技術部で教を請い、光学技術を学んだ。翌1922年に上野で開催された「平和記念東京博覧会」で齊三氏は初めて望遠鏡で天体を観察し、1923年には自ら日本光学製3インチ屈折望遠鏡を購入した。

当時の日本光学は海軍に納める光学機器が売上のほぼ全てを占めていたが、第

一次世界大戦の終結で軍需がなくなり、業績が悪化していた。

齊三氏は民需産業への転換を提案したが、経営陣は民需の開拓ではなく、リストラで事業を縮小する道を選んだ。そこで齊三氏は1926年8月末に日本光学を退社し、翌9月1日に世田谷区三軒茶屋の自宅で五藤光学研究所を開業したのだった。

大衆の手に届く望遠鏡を

五藤光学の最初の製品は、有効口径1インチ（25mm）・焦点距離800mmF32の単レンズ屈折望遠鏡である。この望遠鏡は科学雑誌「科学画報」を発行していた科学画報社から発売された。

齊三氏はかねてから、望遠鏡とプリズム



五藤光学研究所本社の社屋と、正面玄関脇に佇む創業者・五藤齊三氏の銅像。1979年に齊三氏の孫である五藤隆一郎氏が第2代取締役社長に就任、2003年から齊三氏の曾孫である五藤信隆氏が第3代取締役社長を務める。



▶1929年に発売された、アクロマート対物レンズ採用の高性能望遠鏡「ウラノス号」。



を使って自宅の襖いばいに太陽像を映し出す「太陽投映機」を自作して天文仲間に見せていた。この発明が新聞記事になり、齊三氏の望遠鏡を販売したいという打診が科学画報社から舞い込んだのだった。

当時の望遠鏡は非常に高価だった。齊三氏の日本光学での月給が98円だった当時、舶来の最も安い望遠鏡でも255円、日本光学の望遠鏡は550円、ツァイス製は800円で、日本光学では天体望遠鏡は年に1台売れるかどうかという商材だった。1928年(昭和3年)に野尻抱影が小説『宝

▲1936年北海道皆既日食で観測隊総指揮として参加した五藤齊三氏。朝日新聞社との共同観測隊の機材はすべて五藤光学が開発・提供し、ダイヤモンドリングやコロナ、フラッシュベクトルなどを撮影した。



島』の翻訳印税で日本光学製4インチ屈折望遠鏡を購入した逸話が知られているが、それくらい高嶺の花だったわけだ。

そこで齊三氏は、全国の学校長や理科教師などに「天体望遠鏡は教育に必要な、いくらなら買えるか」を聞き取り調査した。結果、30～50円との回答が多かったため、1インチ望遠鏡を30円で科学画報社から発売した。鏡筒はボール紙製だったが、レンズは日本光学から仕入れて齊三氏が自ら検品し、安価ながら品質にこだわった。

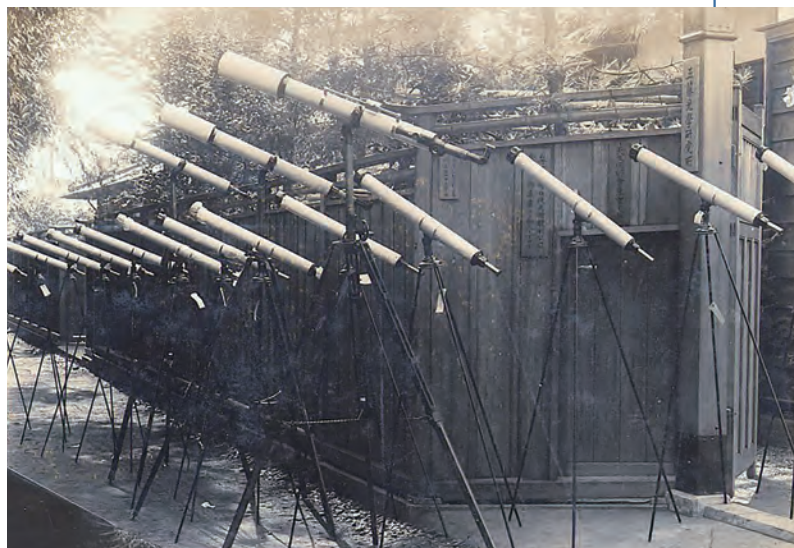
この望遠鏡が評判を呼び、月産100台規模で売れたことで、五藤光学は新興光学機器メーカーとしての基礎を築いた。1928年には、大口径アクロマートレンズを採用した高性能望遠鏡も追加し、大衆の手に届く望遠鏡のレベルを引き上げた。

こうして一般・教育向け望遠鏡メーカーとしての地位を確立すると同時に、五藤光学はプロの需要にも応える高い水準の製品を提供するようになった。1934年のロサップ島皆既日食(※2026年2月号、3月号にて特集)、1936年の北海道皆既日食

など、重要な天文現象でシーロスタットやコロナグラフなどの研究用観測機材を受注開発し、大学や天文台の天文学者の信頼を得た。

三軒茶屋で従業員数名の家内制手工業から始まった五藤光学は、1930年代には世田谷区弦巻、次いで世田谷区駒沢へと事務所・工場を移転し、1938年に株式会社となって順調に事業を拡大させていった。

▼世田谷区三軒茶屋の五藤齊三氏自宅前に、ずらりと並べられた五藤式望遠鏡。口径1インチモデルには、鏡筒・架台が金属製の「甲号」(40円)と、ボール紙鏡筒・木製脚の「乙号」(30円)があり、科学画報社が販売した。



ミュトス アストロノミア
神話から天文学へ

アテナイの学堂

第 5 回

この宇宙は何でできている？ 自然哲学者たちの抗戦

古代ギリシアの哲学者たちの最も重要な関心事のひとつは

「この宇宙は何でできているのか」、

すなわち宇宙のアルケー※1を探求することでした。

初期の哲学者たちは思索の末に次々に

創造的なアルケー論を掲げ、古典期ギリシア哲学までに、

“火” “空気” “水” “土” の四元素を宇宙のアルケーと考えるに至りました。

ここに至る自然哲学者たちの

主張のぶつかり合いをたどってみます。

「豊穡と四元素」ブリューゲル画(1615年ごろ)。
豊穡の女神ケレスを中心に四元素を描いた。
左上の二女神はユノとウェスタ(背中)で、鳥(空
気)と、火を持つ。ケレスの左は海の女神ウェス
トと右下は大地の女神。

ナビゲーター 早水 勉

(はやみず つとむ)

佐賀市星空学習館

星食観測・研究をライフワークとして活動し、
日本天文学会天文功労賞、国際表彰
「ホーマー・タボール賞」を受賞。古代ギリシ
アを中心とする天文学史にも造詣が深く、
連載「エーゲ海の風」をまとめたムック「星の
ギリシア神話研究 星座を彩る物語と文化」
を2024年12月に出版。
ウェブサイト「HAL星研」
<http://hal-astro-lab.com/history.html>

※1 アルケー … ギリシア語で「始まり」「根源」「原理」「支配」などを意味する言葉で、古代ギリシア哲学では「万物の根源」を意味する。ギリシア哲学の根幹をなす用語で、アナクシマンドロスが初めて使用したとされる。

古代ギリシアの自然哲学者 年表	BC7世紀	BC6世紀	BC5世紀	BC4世紀	BC3世紀
	アルカイック期		クラシック期		ヘレニズム期
	BC600	BC500	BC400	BC300	
タレス (Thales BC624ごろ～BC546ごろ)		哲学の祖			
アナクシマンドロス (Anaximandros BC610ごろ～BC546ごろ)		無限論・宇宙論			
アナクシメネス (Anaximenes BC546ごろ)		空気論			
ピタゴラス (Pythagoras BC572ごろ～BC496ごろ)		万物の根源は数			
ヘラクレイトス (Herakleitos BC540ごろ～BC480ごろ)		万物は流転			
アナクサゴラス (Anaxagoras BC500ごろ～BC428ごろ)			万物の種子		
エンペドクレス (Empedocles BC494ごろ～BC434ごろ)			四元素説		
メトン (Meton BC5th)			メトン周期の発見		
ソクラテス (Socrates BC469～BC399)			無知の知		
フィロラオス (Philolaus BC470ごろ～BC385)			ピタゴラス派		
デモクリトス (Democritus BC460～BC370)			原子論		
プラトン (Plato BC427～BC347)			イデア論		
エウドクソス (Eudoxus BC408～BC355ごろ)			「ファイノメナ」		
ヘラクレイデス (Heraclides BC387～BC312)				独自の地動説	
アリストテレス (Aristoteles BC384～BC322)				万学の祖	
主な出来事		BC594 ソロンの改革	BC490 マラ톤の戦い	BC438～432 パルテノン神殿の建造	BC334 アレクサンドロス3世の東征開始

ソクラテス以前の自然哲学

一口に古代ギリシア哲学といってもその時代は非常に長く、BC6世紀ごろのタレスから古代ギリシアの終焉となるAD2世紀ごろまでの7世紀にも及びます。ギリシア哲学の発達史は、一般的にソクラテス (BC5世紀) 以前と以後に分けて分類されています。ソクラテス自身は自然哲学に対する貢献はほぼないのですが、社会規範・倫理哲学において大変革をもたらしました。概ねソクラテスからプラトン、アリストテレスまでが古典期ギリシア哲学とされ、アリストテレス以降はヘレニズム哲学という名称でも分類されます。

本記事で紹介する時代は、タレスに代表されるミレトス派 (2026年4月号参照) 以降のギリシア哲学初期で、ソクラテス以前では最後の自然哲学者たちです。この期間にはヘラクレイトス (Herakleitos BC540年ごろ～BC480年ごろ)、エンペドクレス (Empedocles BC494年ごろ～BC434年ごろ)、アナクサゴラス (Anaxagoras BC500年ごろ～BC428年ごろ) 等の洞察力に富んだ自然哲学者たちを輩出しました。一方でパルメニデスをはじめとする形而上哲学者たちからは猛烈な攻撃を受け、このような論争に鍛えられて彼らの宇宙のアルケー思想は後世に続く重要な礎となりました。



宇宙のアルケーを探求せよ

タレス等のミレトス派の哲学者たちは、宇宙のアルケーを単一の元素としてきました。タレスは「水」といい、アナクシメネスは「空気」、アナクシマンドロスには目に見える実体ではない「無限なもの」と考えていました。

(1) ヘラクレイトスのアルケー

続いてBC6世紀後半に登場したヘラクレイトスは、ミレトスに近いトルコ西部エフェソスの王族階級出身です。ミレトスのアナクシマンドロスに学んだという説もあり、ミレ

トス派の哲学者に含められることもあります。ヘラクレイトスは、人間嫌いで誰にもまして孤高の人物だったと伝えられています。彼は王位を弟に譲って、自らはアルテミス神殿^{※2}に隠棲し「ろくでなしと政治をやるよりずっとまし」と言って子供たちとサイコロ遊びに興じていたと言われます。

ヘラクレイトスは、ミレトス派にみられる宇宙のアルケーは単一の元素とする思想ではなく、「万物は流転する」と主張しました。彼は自然や人間を観察して、“何が元になっているか”ではなく“どのように変化するか”が本質と考えました。なぜなら、水や空気がアルケーだとしても、なぜそれが実在する

ブラック星博士の / B級天文学研究室

室長・ブラック星博士

拡大版

150 発目

お手入れ完了! 明石市立天文科学館 リニューアル

ブラック星博士じゃ。ワシの活動拠点である明石市立天文科学館が2026年7月30日にリニューアル・オープンし、連日の賑わいになっている。今月もワシのマネージャーである井上館長より、報告をお届けする。

明石市立天文科学館、リニューアルしました!

by 明石市立天文科学館館長 井上 毅
大変お待たせしました! 明石市立天文科学館は2025年10月から約10か月にわたる休館を経て、リニューアルオープンしました。

「で、何が変わったの?」と聞かれますが、実は今回もっともお金と時間をかけたのは空調設備です! 変化を感じにくいところですが、暑い夏も寒い冬も快適に楽しめただくためにはとても大切な工事です。照明もLED化しました。天井も素材を工夫して、全体的にスッキリ明るい雰囲気。エレベーターも昇降モーターを交換し「ちょっとスピードアップ! (当社比)」。また展望室の空調工事で天井と床を改装し、結果的にかなりきれいになりました。

せっかく長期休館するのだから、リフレッシュ感をだせるよう、この機会にできることをやろう! ということで、アレやコレやと工夫をたくさん詰め込みました。展望台は「明石海峡絶景展望台」と呼ぶことに。自販機カフェコーナーも用意して、明石海峡大橋を眺めながら一休みできるようにしたらたちまち人気スポットに! ありがたや。



大阪・関西万博で展示された「セイコークラゲ日時計」。直径約2mのクラゲが時を刻んでいます。

大人気の明石海峡絶景展望台。

もちろん当館の投影機・旧東ドイツ、カールツァイス・イエナ社製UPP23/3は健在です。1960年の開館以来66年間働き続ける国内現役

博物館法に基づく「登録博物館」へのステップアップも行いました。工事期間を申請作業の時間にあて、無事リニューアル前に登録されました。申請時に当館のコンセプトを「日本標準時子午線上で時と宇宙と

人をつなぐミュージアム」と決め、これはそのままリニューアルのコピーになりました。

時のギャラリーもリニューアル。いったい「時とはなんだろう?」



最古(アジアでもナンバーワン)のプラネタリウムです。休館中に恒星原板の修繕を行いました。実はベガなどの明るい星に色を付ける特殊なフィルターが経年劣化で少し暗くなっていましたが、今回の修繕で織姫星の輝きが回復しました。一方、全天周映像と音響設備は最新のものに更新。映像は明るく鮮明に、音響もよくなり、低音がいい感じに響きます。学芸員による生解説は変わりません。伝統と最新技術の融合となり、今回のリニューアルを象徴する場所になりました。

さらに、当館の特徴である「時のまち明石」をより深く体感できる展示も充実させました。大阪・関西万博の「クラゲ館」で展示されていた「セイコークラゲ日時計」は、万博終了後に当館へ寄贈されました。ありがたや(2回目)。屋上の日時計広場で、万博

